

菩薩道の倫理

『無量寿経』の場合(その一)

田路 慧

菩薩

大乘仏教の特長は、菩薩道の倫理、すなわち菩薩道という、人間の一つの理想的な生き方を探究、確立、高唱したことにある。

菩薩とは、梵語菩提薩埵の音略で、道衆生、覚有情と訳され、求道者、仏道修行者を意味する。そして自分だけ成仏し救われることを願うのではなく、他者と共に救われんと願う、否、自未得度先度他といわれるように、自己よりも他者の救済をまず第一に考え、一切衆生(全人類)の救済なくして自己の救済もありえないとするところに菩薩の特色があるのである。端的に言えば、菩薩とは上求菩提下化衆生、自利利他円満の願と行の実践者のことである。かかる菩薩を最高の理想的人間像として追求していく生き方が菩薩道なのである。

いわゆる小乗仏教が積尊の修行成道に重点をおき、独覚と呼ばれたように自己一身の解脱、すなわち自利のみを追求したのに対し、大乘仏教の菩薩道は成道後の積尊、すなわち自ら解脱を得た後八十才の入滅までの四十五年間ただひたすらに衆生の教化済度に努め、仏法王国の建設に生涯を捧げた積尊の生き方の中にこそ、仏教の本質と価値があると見、成道後のこの利他教化の活動によって仏陀としての積尊のさとりもまた完成したと考え、かかる利他の実践に専心努力した積尊の姿を人間の理想像としたものといえることができる。

大乘仏教の代表的な経典の一つであり、浄土教の源泉である『無量寿経』は、このような菩薩道の精神の最高の体现者として阿彌陀仏をあげ、阿彌陀仏の阿彌陀仏たるゆえんを、法蔵菩薩と呼ばれた修行時代の願と行とその成就を通して明らかにしたものであり、その特色は特に理想国家「浄土」の実現による一切衆生の救済を高唱するところにあるのである。

本論では『無量寿経』に説かれた法蔵菩薩の願と行を考察することによって、菩薩と菩薩道を明らかにしたいと思う。

発菩提心

菩薩道の出発点は発菩提心(発心)すなわち菩提(さとり)を求める心を発することである。それは人間としての最高真正の生き方を追求せんとする決意であるから無上正真道意と訳される。

すべての人間には本来ことごとく仏性(成仏への可能性)があるのであるが、その仏性が種々の因縁によって呼び起こされるのが発心である。その契機は、老・病・死・闘争・罪の意識等さまざまであるが、最も多くかつ効果的なのが目覚めた人との出会いであり、その教えに接する場合である。『無量寿経』には法蔵菩薩の発心の契機が次のように述べられている。

「時に、(一)國王あり、(かの)仏(世自在王仏)の説法を聞いて、心に悦子を懐き、すなわち無上正真道の意を發し、国を棄て、王(位)を捨て、行きて沙門となり、号して法蔵といえり。」(二二八)

ここに目覚めた人との出会い、すぐれた師をもつことの重要なゆえんがあるのである。経中において積尊も次のように説かれている。

「寿命、はなはだえ難く、仏の世、また値い難し。人、信・慧あること難し。もし(法を)聞かば、精進して求めよ。法を聞きて、よく忘れず、法を見て敬い、得て大いに慶ばば、すなわち、わが善き親友なり。このゆえに、まさに意を發すべし。」(二七〇)

かく発心し、道を求め続ける人が菩薩なのである。

誓願

発菩提心は、成仏への願い、すなわち真実の人間になりたい、人間らしい真実の生き方をしたいという願いとなって発露する。この願いは人間の人間としての根源的な願いであるから「本願」と呼ばれ、必ず成しとげんと堅い決意を伴うとき「誓願」と呼ばれる。もしこのような願いをもたないならば、人間は自己の趣むくべきところを知らず、醉生夢死のうちにその生を終らざるをえないのである。まさに本願こそ菩薩道の要として、人間をして菩薩たらしめるところのものなのである。経にも法蔵菩薩の願と決意が次のように述べられている。

「われ、超世の願を建て、必ず無上道に至らん。この願、満足せずんば、誓って正覚を成ぜじ。われ、無量劫において、大施主となりて、あまねくもろもろの貧苦(の者)を濟わずんば、誓って正覚を成ぜじ。」(二四三)

四弘誓願

菩薩の誓願は、願作仏度衆生、自覚覚他覚行窮満の願いに要約でき、それをさらに具体化したのが「総願」と「別願」である。

総願はすべての菩薩に共通する誓願で、「衆生無辺誓願度、煩惱無數誓願断、法門無尽誓願学、仏道無上誓願成」の四項目にまとめられ、「四弘誓願」と呼ばれている。

まず最初に衆生無辺誓願度と、利他すなわち全人類の救済を誓願するところに菩薩の本質があるのである。後の三は自利すなわち成仏への誓願であるが、それも第一の誓願の成就に帰するのである。仏陀とはさとり智慧のはたらきによって衆生を無限に済度する人のことであるから、無上の仏道を成ずるとは、まさに無辺の衆生を度することにはかならないのである。

経の讚仏偈に表明されている法蔵菩薩の誓願は、この四弘誓願にあたるものである。

「われ、仏とならん、国土をして、第一ならしめん。その衆、奇妙にして、道場、超絶し、国、泥洹のごとくにして、等しく雙ぶものなからしめん。われ、まさに哀愍して一切を度脱せん。十方より來生せんもの、心、悦び、清浄にして、すでにわが国に到らば、快樂、安穩ならん。」願わくば、われ仏とならん、聖法王に育しく、生死を過度して、解脱せざるなからん。布施、調意、戒忍、精進、かくのごときの三昧と智慧とを、上れたりとせん。われ、誓う、仏となりて、あまねくこの願を行じて、一切の恐懼(の人々)に、ために大安をなさん。「たとい、身はもろもろの苦毒の中に止まるとも、わが行は精進にして忍んで終に悔いざらん。」(一三〇—一四〇)

このように法(真理)に基づき、法の支配する清浄仏国土、「浄土」を建設することによって、一切衆生を済度せんと堅い決意が表明されているところに、法蔵菩薩の誓願の特色があるのである。

別願

菩薩は総願によってその帰趣を得るのであるが、総願はまだ総括的抽象的である。総願が現実社会の中で実現されるためには、さらに個別化され、特殊化されねばならない。そこで個々の菩薩によって立てられた具体的な誓願が「別願」と呼ばれるものである。

法蔵菩薩の場合は四十八の別願が立てられている。そして法蔵菩薩あるいは阿弥陀仏の特質はこの別願にあるのである。

四十八願

四十八願は法蔵菩薩のめざす理想国家「浄土」の具体像を表わすものであり、法蔵菩薩をして阿弥陀仏たらしめたゆえんのものである。そしてそれは人間のあらゆる願い、精神的物質的、あるいは道德的宗教的、文明的(狭義の)な願いが集約されたものである。もちろん阿

弥陀仏を信じ、浄土を願ひ、無量寿經を生み出した人々の願ひであるから、時代的場所的制約をうけていることはいうまでもないが、そのほとんどが次に見るように、現代にも、全人類にも共通する願ひである。法蔵菩薩の四十八願には、人間の人間としての永遠にして普遍的な願ひが凝縮されているということができよう。

では四十八願を、文明的誓願、道徳的誓願、宗教的誓願に仮りに分類して（無理を承知の上で）述べることにしたい。

まず文明的誓願から見てみよう。

第三十一国土清浄の願、第三十二宝香合成の願は、国土が清浄であつて、他の一切の仏国土をのこりなく見學することができ、国土の自然も建造物も諸設備もことごとく完備し、すぐれたものであること、第二十七所須嚴浄の願、第三十八衣服隨念の願は、ともに衣食住が完備し、生活に必要な器具も良質の物が豊富にあつて不自由のない社会であること、第十五眷属長寿の願は、国民のすべてが長寿を保ち、人生を全うすることができること、第二十七那羅延身の願は、国民が心身共に健康ですばらしい肉体を持つことを願つたものである。

第五宿命通の願、第六天眼通の願、第七天耳通の願、第八他心通の願は、それぞれすべてを完全に、見たい、聞きたい、知りたいという人間の根源的な願ひを表わすものであり、第九神足通の願は、自由な交通往来への願望をこめたものである。

第二十五説一切智の願、第二十九得弁才智の願、第三十智弁無窮の願は、自己を正しく表現し、他者に十分に理解されたい、真理を残らず完全に知らしめたいという人間の本能的ともいえる願ひを表わすものである。

このように『無量寿經』は、浄土を単に精神的観念的なもの、単な

る境地とすることなく、物質的な願ひをも高く掲げ、その十分なる充足の場となしている点注目すべきである。これらの願ひを充足するための人類の積年の努力の成果が現在の文化文明である。そして今なお人類はこれらの願ひをいっそう完全に充足するために、學問や科学技術の發達に努力を続けているのである。

次に道徳的な誓願を見てみよう。

第一無三惡趣の願は、この世に地獄や餓鬼、畜生のような心をもつた人間をなくしたいという人々の切なる願ひ、第二不更惡趣の願は一度そのような心を克服したら二度と起らぬようにしたい、第十六無諸不善の願はこの世に惡という言葉すらなくしたい、第十漏尽通の願は惡の根源である煩惱を絶滅したい、第二十植諸徳本、第四十四具足徳本の願はさまざまの善根功徳を実践具備したいという願ひを表わし、いずれも道徳の根本的な願ひを示している。

さらに第三悉皆金色の願は人種差別や種姓の差別、第四無有好醜の願は美醜の差別、第三十五女人成仏の願は男女の差別、第四十三生尊貴家の願は貧富家柄の差別、第四十一諸根具足の願は身体障害者への差別と、あらゆる社会的差別の廢止を強く打ち出し、差別のない社会の実現を強調していることは注目すべき点である。これは仏教の本質である「空」、あるいは無分別智に基づく無差別平等の真如の立場を現実社会に妙有的に実現せんとしたものということができる。不当な差別は最も非人間的なものであり、あらゆる惡徳の根源である。一切の不当な差別の否定こそ、人間の本来的な願ひであり、人類の宿願である。かかる不当な差別との戦いが人類の歴史を形造ってきたのであり、そして今なおいたるところで差別廢止の戦いが続けられているのである。まさに差別の否定こそ道徳の使命であるということができよう。

次に宗教的な誓願を見てみよう。

第十二光明無量の願、第十三壽命無量の願は、永遠なるもの絶対的なるものへの、無限の光と命への人間の根源的な願求の念を表わすものであり、それは死と暗黒に対する人間の本能的な恐怖を示しており、これらの願いこそ宗教の源をなすものなのである。永遠絶対なる仏陀への憧憬がこれらの願いにこめられており、ここに光明無量、壽命無量の完全なる救済者阿彌陀仏が生み出されたゆえんがあるのである。

第十七諸仏稱揚の願は名号成就の願とも呼ばれるように、超世の願をたて、浄土を建設し、衆生救済の場を完成した阿彌陀仏の名が諸仏に称讃されることを願ったもので、ここに阿彌陀仏の名号が確立し、次の「念仏」(「聞名」という無量寿経独自の救済の方法が根拠づけられたのである。

第十八念仏往生の願は、浄土教家達によって王本願と呼ばれているように、四十八願中最も重要なものであり、阿彌陀仏の本願の特質をなすものである。すなわちこの本願によって「念仏」という浄土往生の方法が確立されたのである。阿彌陀仏を念ずるとは、第十七願で成就された阿彌陀仏の名号を聞くことで、名号を聞くとは、第三十三触光柔軟の願、第三十四聞名得忍の願に示されているように、阿彌陀仏の智慧の光明に摂せられ、不生不滅の真如をさることである。かくして「念仏」「浄土往生」という無量寿経独自の救済の方法、解脱への道が確立されたのである。

第十九臨終現前の願は、死の恐怖と不安におののく人間の心に安らぎを与えるためのもので、第三十七人天致敬の願と共に、念仏の行者のうける利益を示したものである。

第三十九受樂無染の願は、浄土は「極樂」とも呼ばれるように樂し

み極まりないところであるが、単なる欲樂境ではなく、あくまでも法樂の場であり、楽しく修行にいそむことのできる場であることを示すものである。したがって浄土は、第二十八見道場樹の願にみられるように、あくまでも仏道成就のための修行の道場なのである。このことは、第十四声聞無數の願、第四十六隨意聞法の願、第三十六常修梵行の願にみられるように、浄土における聞法、修行が強調されているのをもみても明らかである。そして浄土での修行成就のため他の諸仏国土を見学し、諸仏に学ぶことを勧めるものとして、第四十見諸仏土の願、第四十五住定見仏の願、第四十二住定供仏の願、第二十三供養諸仏の願、第二十四俱具如意の願があげられているのである。

さらに浄土での修行が確実に成就するための保証として、第十一必至滅土の願、第二十二必至補処の願、第四十七得不退転の願があげられている。浄土とはまさに修行によって必ず確実に彼岸に到ることの保証された場なのである。そして第四十八得三法忍の願において、一切衆生をして仏道を成就せしめ、不生不滅の真如を体得せしめて仏陀となさんと誓われているのである。

これら四十八願のすべては、「もし、しからずんば正覚を取らじ。」という堅い誓いの言葉をもって結ばれているが、これは自分だけ成仏して安樂をひとり味わうようなことはしない、たとえ自分は成仏できても苦惱する衆生がひとりでもいるかぎり、彼と苦惱を共にし共に救われんと仏の大慈悲心を表わすものである。かかる「不住涅槃」の決意こそ菩薩の本懐なのである。

以上みてきたように、法蔵菩薩の四十八願は、理想国家「浄土」を建設し、そこに一切衆生を往生せしめて救済し、成仏せしめんとするものであるが、救済や成仏を単に精神面のみに限ることなく、人間の

精神的物質的な欲求を全面的に肯定し、その完全なる満足を人間の本願となし、それらが残りなく充足される国家社会の建設を理想として、かかる理想社会の実現こそ、自己と他己、ないし全人類救済の最善の道であることを高唱し、その実現への努力の全体において仏道成就を考えているところに意義があるといえることができる。

浄土の行

理想国家「浄土」は、まさしく浄土すなわち国土を清浄化することによって実現されるのであるが、では浄土の行とはどのようなものだろうか。

経には、

「布施、調意、戒忍、精進、かくのごとき三昧と智慧とを、上れたりとせん。」(一三〇)、「みずから六波羅蜜を行じ、人にも教えて行ぜしむ。」(一四五)

とあるように、法蔵菩薩の浄土建設の行として、六波羅蜜と四摂法があげられている。

六波羅蜜

六波羅蜜(波羅蜜は梵語パーラミターの音写で「度」「到彼岸」「事究竟」と訳される)とは、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧という、菩薩が迷いの此岸からさとり彼岸に渡るため修行実践しなければならない六種の行のことである。

布施波羅蜜の布施とは、施し恵むこと、自分にできることを他人のため社会のために提供することであって、衆生無辺誓願度の具体化である。

布施には、財施(金銭や物資等を施すこと)、法施(教法を施すこと)、無畏施(恐怖や不安を除き、安心を与えること)の三種があるが、特に重

要なものは法施である。法施は自己の体得した真理(仏法)を教え広め、あるいは自分のよいと思うことを人にも勧めて仏道に導き済度すること、経には次のように述べられている。

「専ら法を業い求めて、心に厭足なし。常に広説することを欲して、志、疲れ倦むことなし。法鼓を撃ち、法幢を建て、慧日を曜やかし、癡闇を除く。六和敬を修し、常に法施を行じ、志勇あり精進して、心退弱せず。世の燈

明となりて、最勝の福田たり。」(一七六)

布施は三輪清浄といつて、施者、受者、施物共に本来空であつて、それらにとらわれたり、押しつけ、恩着せの心があつてはいかなる布施も布施波羅蜜とはならないのである。したがつて布施は自分にとって喜捨でなければならず、自己の我執我所執との戦いである。

「国を棄て、王(位)を捨て、財と色とを絶ち去りて、みずから六波羅蜜を行じ、……」(一四五)

と経にあるように、布施をもって自己の我執我所執、すなわち一切のとらわれ(煩惱)を打破すべく戦うことが成仏への最善の道なのである。まさに利他即自利である。かくして布施波羅蜜の極致は、一切のとらわれを離れること、すなわち「自由」であるが、経には次のように述べられている。

「その国土のあらゆる万物において、我所の心なく、染着の心なし。去くも来るも、進むも止まるも、情に係くるところなく、意に随つて自在なり。適莫するところなく、かれもなくわれもなし。競うことなく、訟うることなし。もろもろの衆生において、大いなる慈悲、饑益の心をえたり。」(一七三—一七四)

かかる布施行を支えるのが、持戒波羅蜜である。持戒とは教団ないし社会生活の規律を守り、身を清浄に保つこと、煩惱無尽誓願断の実践である。持戒をもって身を律し、生活を正し、心身を鍛錬することによつてのみ仏道実践も可能なのである。戒が防非止悪の力、諸善発

生の源として、仏道修行の基礎とされるゆえんである。

戒には、代表的なものとして五戒ないし十戒があり、大乘菩薩戒としては三聚淨戒、また在家の信者が齋日に一日一夜守るべきものとして八齋戒等がある。持戒について経には次のように述べられている。

「欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず、欲想・瞋想・害想を起さず、色・声・香・味・触・法に著せず、忍力を成就して衆苦を計らず、少欲知足にして染・患・癡なし。」^⑧「鬻言のみずから害すると、かれを害すると、彼此ともに害するを遠離し、善語のみずから利すると、人を利すると、人とわれと兼ね利するとを修習す。」(一四五)

この持戒波羅蜜を支えるのが忍辱波羅蜜である。忍辱とは、他よりの侮辱迫害を耐え忍んで怒らず(耐怨害忍)、苦難に遇つても心を動ぜず(安受苦忍)専ら法(真理)を求めて、法に心を安んずる(諦察法忍)ことで、ただ耐え忍ぶのではなくて、すべて成菩提のために耐えるのである。したがって忍辱波羅蜜は忍耐とともに、大きく広くすべてを包容する慈悲の実践をも意味するのである。経には次のように述べられている。

「忍力を成就して衆苦を計らず、少欲知足にして染・患・癡なし。」^⑨「虚偽詬曲の心あることなく、和顏愛語して、(衆生の)意に先んじて承問す。」(一四五)「もろもろの庶類のために、不請の友となり、群生を荷負して(おのが)重担となす。」(一二四)

そして忍辱波羅蜜は、「たとい、身は、もろもろの苦毒の中にとどまるとも、わが行は、精進にして、忍んで終に悔いざらん。」(一三一)と、求道への強固な決意となつて発露するのであるが、これと表裏をなして、諸波羅蜜の実践を促進するのが精進波羅蜜である。

精進とは一心に勇敢に善を努め励むことで、誓願成就はひとえにこの精進波羅蜜にかかつており、発菩提心を菩薩道の原動力とすれば

精進波羅蜜はその推進力である。菩薩は、「勇猛精進にして、志願倦むことなく、専ら清白の法を求めて、もつて群生を恵利し」(一四五)しかも「不可思議の兆載の永劫において」(一四四)倦まずたゆまず「菩薩の無量の徳行を積植」(一四四)すべく努力を続けなければならぬのである。まさに「精進不怠」「仏道是精進」といわれるゆえんである。経にも次のように述べられている。

「たとえば、大海を一人にて升量せんに、劫数を経歴せば、なお底を窮めて、その妙宝をうべきがごとし。人、至心に精進して、道を求めて止まざることあらば、かならず、まさに剋果すべし。何れの願かえざらん。」(一三一)

かかる精進波羅蜜を支えるのが禪定波羅蜜である。禪とは梵語禪那の音略で、定、静慮、思惟修と訳され、慮を静め、心を一つの対象に専注してつまびらかに思惟し、定と慧とが等しく具わることという。禪定なつてはじめて真如は顯となるのである。したがって禪定と智慧とは常に相即して述べられている。

「(心は)三昧(に入り)常に(静)寂にして、智慧無礙なり。」(一四五)「深禪定ともろもろの通・明・慧を得て、志を七覚(支)に遊ばしめ、心を仏法に修す。」(一七三)「広普寂静をもつて、深く菩薩の法蔵に入り、仏の華嚴三昧をえて、一切の經典を宣暢し演説す。深き定の門に住して、ことごとく現在の無量の諸仏を觀たてまつること、一念の頃(に)周備せざることなし。」(一二四)

かくて禪定波羅蜜は法門無尽誓願学の実践であり、仏道無上誓願成すなわち智慧波羅蜜への門なのである。

智慧波羅蜜は前五波羅蜜の帰趣であり、前五波羅蜜をして波羅蜜たらしめるものである。智慧とは諸法実相すなわちすべての事象の真実の姿を如実に知見するはたらきのこと、有無相對の分別をこえた絶

対平等の智慧であるから、無分別智とかさとり智慧とか呼ばれている。われわれは智慧によって真如の理法を体得し、解脱をえて涅槃に入ることができるので、智慧波羅蜜は諸仏の母と称されている。仏陀とはまさに智慧波羅蜜を円満成就した人のことなのである。ではさとり智慧とは具体的にどのようなものであろうか。

「善く無畏の網を学び、幻化の法を曉らかに了る。魔の網を壊裂して、もろもろの纏縛を解く。声聞・縁覚の地を超越して、空・無相・無願の三昧をえたり。」〔諸法の〕不起・不滅にして、平等の法をえたり。〔二二三〕
「空・無相・無願の法に住して、作なく、起なく、法は化のごとしと観す。」〔一四五〕
「三界は空にして、所有とするものなし。」と等観して、仏法を志求し、もろもろの弁才を具し、衆生の煩惱の患を除滅す。〔一七三〕
「一切の法は、みな、ことごとく寂滅なり。」と知りて、生身と煩惱の二余ともに尽せり。〔一七四〕

智慧とはまさに「空」の理法の体得である。すなわち一切の事象は因縁によって生起消滅し、相即相対の関係にあって実体がなく（無我・無常、無自性）したがって空である。一切は空なるがゆえに幻のごとく仮に姿を現わしたものであって、そこには差別はなくすべて平等であり（無相）、わがものと特に執着し願求すべきなものもない（無願）のである。すべて縁起の法によらざるものは何一つなく、縁起の法によらずして何事も成らず、縁起の法によれば成就できない何事もないのである。かくして一切は空無我なるがゆえに、相依相資して調和を保ち変化發展してゆく（涅槃、寂滅）のである。かかる諸法の実相は永遠にして普遍妥当な真理であるから、不生不滅の平等の法と呼ばれるのである。このような縁起の法、すなわち空の理法の覚知体得がさとり智慧なのであって、それはまた無生法忍とも称されている。かの四十八願の主眼も、聞名得忍の願、得三法忍の願に代表されるように、このさとり智慧、無生法忍を衆生に覚知せしめ、成仏

させんと願につきてるのである。

かくて菩薩は智慧波羅蜜を実践体得することによって真如の世界に帰入し、さらに「如より來生して、法の如如を解り」〔二七四〕とあるように、真如の世界から來生して真如を体現し如來となつて、真如の力によって衆生済度の行を實踐し続けるのである。經に「無量の宝藏は自然に心中より発應し、無数の衆生を教化安立して、無上正眞の道に住せしむ。〔二四六〕とあるごとくである。

このように智慧波羅蜜も第一の布施波羅蜜に帰してはじめて智慧波羅蜜たりえ、かくして六波羅蜜は完成し、パラミターすなわち最高完全なる行となるのである。

六波羅蜜を原始經典や部派仏教の修行法である八正道と比較してみると、六波羅蜜は正見・正思を智慧に、正語・正業・正命を持戒に、正精進を精進に、正念・正定を禪定にと八正道の全項目を含み、さらに八正道にはない布施と忍辱という利他の項目を掲げている。このように利他行を加えて八正道を止揚し、自利利他を総合したところに大乘菩薩道としての六波羅蜜の特長があるのである。

かかる六波羅蜜の利他行を補助し推進するために、菩薩の修すべき行として掲げられているのが四摂法である。

四 摂法

四摂法とは菩薩が衆生に近づき、仏道に導いて済度するために修すべき、布施、愛語、利行、同事の四種の行のことである。

布施は布施波羅蜜と同じであり、次の愛語以下は布施行を成就するためのものである。

愛語は、慈愛に満ちた言葉をもって衆生に接すべきことをいう。逆境にある者にとって慈愛に満ちた言葉はなにもにもまさる励ましである。經に「和顔愛語して、（衆生の）意に先んじて承問し」〔二四五〕、

「大悲を興して、衆生を慰れみ、慈弁を演べ、法眼を授け、三趣を杜ぎ、善(趣)の門を開く。」(一二四)と述べられているごとくである。

利行は、衆生に利益を与える種々の行為をなして仏道に導くことで、文字通り利他の実践である。どんなに小さな行為であっても利他の心でなされるならば、それは菩薩の利行である。

同事は、衆生の機根に応じて、形を變じ、立場を同じくして衆生の中に入り、行動を共にし苦楽を共にして仏道に導くことで、すべて利他行は相手本位であるべきことをいうものである。經に、「たとえば、幻師の、もろもろの異像を現するに、男となり、女となって、変ぜざるどころなく、本学明了にして、意の所為に在るがごとし。」(一二三)とあり、また「もろもろの庶類のために、不請の友となり、群生を苛負して、これを(おのが)重担となす。」(一二四)とあるがごとくである。

菩薩の理想像

かくて菩薩とは、発心して誓願をたて、六波羅蜜、四摂法を行じて誓願成就をめざし、衆生と共に救われんと努力奮励する人のことであるが、かかる菩薩の理想像を経は次のように述べている。

「世間の、もろもろの所有の法を超過して、心、常に、諦らかに度世の道に住し、一切の万物において、意に随って自在なり。もろもろの庶類のために、不請の友となり、群生を苛負して、これを(おのが)重担となす。如来の甚深の法蔵を受持し、仏の種性を護りて、常に絶えざらしむ。大悲を興して、衆生を慰れみ、慈弁を演べ、法眼を授け、三趣を杜ぎ、善(趣)の門を開く。請われざるの法をもつて、もろもろの黎庶に施すこと(なお)純孝の子の、父母を愛敬するがごとし。もろもろの衆生を視そなわすこと、自己のごとし。一切の善本は、みな、彼岸に度し、ことごとく諸仏の無量の功德を獲、智慧の聖明なること思議すべからず。」(一二四)

浄土への勸奨

かくして法蔵菩薩は、菩薩道を円満成就して国土を清浄化し、理想国家「安樂浄土」を完成し、みずからも成仏して阿弥陀仏となったのである。

「法蔵菩薩、いますでに成仏し、現に西方にまします。ここを去ること十萬億刹なり。その仏の世界を名づけて安樂という。」(一四六)

そして阿弥陀仏はわれら衆生に向って、「汝らも発心して浄土を願生し往生して菩薩道を行じ、わがごとく浄土を建設して衆生済度に努めよ。」と呼びかけているのである。また釈尊も、「汝ら浄土に往生して、阿弥陀仏のもとで修行し、阿弥陀仏のごとく嚴浄の土を建設せよ。」と勧められているのである。經には次のように述べられている。

「東方の諸仏の國、その數、恒沙のごとし。かの土の菩薩衆は、住きて無量覺をみたまつる。南・西・北(方)四維・上下(の仏國)もまたまたしかり。かの土の菩薩衆は、住きて、無量覺をみたまつる。」(二六六)

そして浄土に集まって来た菩薩達は、
「かの(無量尊の)嚴浄の土の、微妙にして思議し難きを見て、よりて無上心を発し、わが國もまたしからんと願う。」(二六六一―二六七)

のである。それ知って阿弥陀仏は欣笑を發し、清浄にして妙なる声をもつて次のように述べられる。

「まさに、菩薩に記を授くべし。いま説かん。なんじ、あきらかに聴け。十方より来れる正士の、われ、ことごとくかれの願を知る。(そは)嚴浄の土を志求することを。(かれ)決を受けて、まさに仏となるべし。一切の法は、なお夢・幻・響のごとしと覺了して、もろもろの妙なる願を満足せば、かならず、かくのごときの利を成ぜん。法は電・影のごとなりと知りて、菩薩の道を究竟し、もろもろの功德の本を具せば、決を受けて、まさに、仏となるべし。もろもろの法の性は、一切空・無我なりと通達して、専ら浄き仏土を求めば、かならず、かくのごときの利を成ぜん。」(二六七―二六八)

そして諸仏も浄土往生を勧めたように説いて励まされるのである。

「法を聞き、楽しんで受行し、疾く清浄の処をえよ。かの競浄の国に到らば、すなわち速やかに神通をえ、かならず無量尊において、記を受けて等覚を成ぜん。その仏の本願力により（仏の）名を聞きて往生せんと欲せば、みな、ことごとくかの国に到りて、おのずから不退転（の位）に致らん。菩薩よ、至願を興しておのが国も異なることなからんと願ひ、あまねく一切を度さんと念わば（その名）あきらかに十方に達せん。」（一六八）

さらに釈尊も次のように説いて、発心し仏道を成就せよ、と激励されるのである。

「寿命、はなはだえ難く、仏の世、また値い難し。人、信・慧あること難し。もし、（法を）聞かば、精進して求めよ。法を聞きて、よく忘れず、（法を）見て敬ひ、得て大いに慶ばば、すなわち、わが善き親友なり。このゆえに、まさに意を発すべし。たとい、世界に満でらん火をも、かならず過ぎて、要めて法を聞かば、かならず、まさに仏道を成じて、広く生死の流れを濟すべし。」（一七〇）

機根の問題

ところでわれわれは発心して菩薩道を行ぜんと志すとき、はたと立ちどまらざるをえないのである。はたして菩薩道はわれわれ凡人に可能なのであるか。どんなに努力しても純粹無垢な布施行などできるはずがないのである。自分自身すら度し難いのに、一切衆生済度など思いもよらないことである。まして利他慈悲だと言ひながら、他人の不幸をひそかに喜び楽しむのが人の常である。経の三毒五悪段に述べられている衆生の有様が、われわれの実際の姿ではなかるうか。至心に真剣に努力せんとすればするほど絶望は深まるばかりである。

「しかるにわがこの身は、戒行において一戒をもたまたず、禪定において、一もこれをえず。人師釈して、尸羅（戒）清浄ならざれば、三昧現前せずといへり。又、凡夫の心は物にしたがひてうつりやすし。たとえば猿猴の

枝につたふがごとし。まことに散乱して動じやすく、一心しずまりがたし。

無漏の（煩惱を離れた）正智、なによりてかおこらんや。若し無漏の智剣なくば、いかでか、悪業煩惱のきづなをたたんや。悪業煩惱のきづなをたたずば、なんぞ生死繫縛の身を、解脱することをえんや。かなしきかな、かなしきかな、いかがせん、いかがせむ。」

比叡山において、智慧第一の法然坊と呼ばれた法然ですら、このように歎き悲しまざるをえなかつたのである。また親鸞も、

浄土真宗に帰すれども
眞実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて
清浄の心もさらになし

外儀のすがたはひとごと
賢善精進現せしむ
貪瞋邪偽おほきゆへ
奸詐もはし身にみてり

悪性さらにやめがたし
修善も難毒なるゆへに
虚仮の行とぞなづけたる

と悲歎し続けたのである。ましてわれわれ凡愚の輩においてをやである。

しかし、まさにこのような愚癡蒙昧、罪惡深重の凡夫こそ、救われねばならないのである。ではこのような凡愚に、賢愚善悪、食富貴賤、老若男女を問わず、容易に確実に実践できる救済の方法、成仏への道はないのであろうか。

まさにかかる凡愚の願いに応えんとしたところに『無量寿経』の眞の目的があつたのである。 (未完)

註 ① 康僧鑑訳『仏説無量寿経』中村 元、早島鏡正、紀野一義訳註、『浄土三部経』上巻（岩波文庫）をテキストとした。引用文の末尾の数字は同書の頁を示す。なお、同書の梵文和訳及び、坪井俊映著『浄土三部経概説』（隆文館、一九六五）を参照した。
本文中において『無量寿経』は『経』と略して用いた。

② 五 戒……不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒

十 戒……不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不誑語、不兩舌、不

惡口、不貪欲、不瞋恚、不邪見。「十善」とも言う。

三聚淨戒……攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒

八齋戒……先の五戒に次の三つの戒を加えたもの（ただし不邪淫を不

姪戒、あるいは離非梵行戒とする）

六、離睡眠坐高広踞麗牀座 七、離塗飾香鬘 離舞歌觀

聽 八、離非時食戒

③ 『法然上人行狀絵図』数江教一著『本願念仏のえらび―選択集八法
然』『日本の仏教』六、（筑摩書房）二九頁より。

④ 親鸞著『正像末和讃』「愚禿悲歎述懐」金子大栄編『真宗聖典』（法
藏館）五六七頁

（昭和四十五年三月三十一日出稿）